

苦悩と人生の意義

一、涙の深淵

「人生は苦なり。」とは大聖釈尊の第一絶叫でありました。

それは人生がいわゆる苦だけだとの御言葉ではありません。苦があれば楽があります。苦樂の対立があることが、人生は苦なりと言うことなのであります。龍樹菩薩は「苦の新たなるものを樂という。」と言われてあるようですが、樂とはまことに苦の新たなるものであります。かくて人生は苦にはじまって苦に終ります。世には「人生は樂なり」と言おうとする人がありますが、はたして人生は樂なのでしょうか。人生に苦があるのではなくて、苦そのものが人生であり、生活であります。眼を人生の奥底にひそめる時、そこには無限の涙の深淵がたたえられています。朝に涙の哀史を聞かされます。夕べに苦悩の訴えを聞きます。人間苦のどよめきが、年々深刻になって聞えて来ます。

ついに人生は苦悩であります。親鸞聖人は「生死の苦海ほとりなし、久しく沈める我等をば……。」と申していられます。

「私には苦悩はありませんと申す人があります。

人生を知らぬ人です。一寸変事に出会ったら破壊されます。

あれほど一切生きとし生ける者が苦闘していても、共鳴を感じない冷淡な人です。

「人生は楽しいのが当然です。」と言う人がある。

それだからこそ、あなたのお顔が曇っているのです。

「人生は苦である。」と見た所に、やがて大樂天も生れて来ます。

二、苦に生きる態度

独生独死独去独來の自覚。「はてしなき広野、後も前も左右共に、人の子一人いない天地にたった一人、西に旅を続けてゆく旅人があった。」それが昔の聖者が見た人生であった。

「たった一人だ。」それはど寂しい人生の見方はない。

親の懐をはなれて嫁入りをします。

打ちとけたようでも姑との間に溝があります。夫の心がわからぬ。家庭の全体が冷たい。子供が出来る。苦しみが増す。時には病気になる。夜半静かに人知れず寂しい涙が頬をつたわる。そうした寂しさを感ずる。「たった一人だ。」しかしこうした寂しさはまだ簡単です。

彼女は一人娘に生まれました。年頃になった時に婿養子をもらいました。その間に一人男の子が生まれましたが、両親の気に入らないので養子は離縁になりました。そして間もなく、第二の養子が来ました。第一の養子に失敗した両親は、第二の養子を警戒してかかった。「三年たたねば財産は譲れぬ。」と、それが両親の意見であった。養子は三四千円の資本で商業を始めた。彼はその内に遊蕩をはじめて、酒と女に心を乱しはじめた。酒をのんでは夜おそく帰ることのある養子を見て、一家は暗い顔になった。三年の歳月は流れた。けれども両親は、養子に財を譲ろうとはしなかった。

「あんな様子では、あんな態度がなおるまでは財産は譲れぬ。」と父は言った。養子はそれを見て腹を立てた。そして彼の遊蕩はやまなかつた。両親と養子とは一日として心から打とけたことはない。いやな毎日が流れく／＼て今はもう、先夫の残した息子も二十歳になった。財産はこの二十歳の孫に譲られてしまった。「俺の一生涯にはもう何の光もない。この上は、飲んだり食ったり女を買ったりして楽しんだほどが俺のものだ。」

夫の心はそれだけになった。この天日の曇った一家の中心は真に彼女である。両親は言った。

「なぜお前は、あんな男を離縁する気にならぬのか、親不孝者めが。」

先夫の息子は母を責める。更に夫はおどしつけた。

「離縁するなら離縁せよ。その代りに、どんなことがあつてもびつくりするな。」と酒気をおびた夫はけつこう殺しでもしかねまじき気色である。あるいは又「いつでも出てやる。そのかわり、家を建てよ。財産を何割渡せ。」という。

両親と我が子と夫との間に立つて、彼女はたった一人涙の生活を送ること十数年。「わたしはどうすればいいのです」と泣く。来た嫁なら帰ることも出来る。去ることも逃げることも出来ぬ彼女の身の上。たった一人！

それはただその婦人だけの身の上か。

聖者たちは、その姿を自分の上に見た。

2

一寸つきつめて考えた時、誰にでもたつた一人であることがわかる。

一人にいるから一人なのではない。多数の人たちと一緒にいてもたつた一人だ。

何万と集つた雑沓の中でもこの感じをもつ。

大衆の前に講演する時にもこの寂しさがおしよせる。

こうした自覚の中にいつたい我等は如何に生きるか。

自ら助けよ。「わたしは如何に生きてらいいのか。」それが万人の聞こうとする問題です。

「私を助け、私を救う者は誰なのか。」

まず、そうした問題を提げて考えて見ます。

まず、いちおうは親が私を助けてくれます。兄弟が私を助けてくれます。夫が妻がその他の一切人が私を助けてくれます。

しかし一歩足を社会にふみ出します。父や母の愛の手は私には届きませぬ。失敗するのも私です。成功するのも私です。勝つもまけるも私です。壇上に立ちます。天上天下、私を助けるものは私だけです。

かわいい娘が今日を晴れと嫁入します。両親の愛の手はとどきませぬ。勝つもまけるも娘を助ける者は娘です。

百メートルのランニングの選手が出発点に立ちます。両親や兄弟が声をからして応援します。しかしそれが彼には本質的な助けではありません。

誰か人生の桧舞台に立ったこの選手でないものがありましたよ。

あなたは、この人生の長い一人旅の世界に立った時、真にその用意をし、決意をして立ったでしょうか。

「天は自ら助くる者を助く。」とは名高い金言であります。嫌でも好きでも、寂しくても悲しくても、私を最後に助ける者は我であることを知りつくさねばなりません。いたずらに泣いていても何にもなりません。

身の上や他人を呪ったり、責めたりしていたとて何にもなりません。

金儲け、病気、禍福、家運、方角等を、神々に祈祷したって何にもなりません。昭和の今日でもまだ、日の吉凶を言ったり、運命を神に祈ったりしている者さえあります。

出発しましょう。とにかく、黙って出発しましょう。坐っていたはずらに論じていたとて何にもなりません。

我は我を助けるために出発するのです。

親に言えば意見は言ってくれます。兄弟に語れば同情はしてくれます。援助もしてくれます。けれども、歩むのはあなたです。努力するのはあなたです。知るのもあなたです。楽しむのも苦しむのも一切あなたです。親も兄弟もそして何人も、あなた自身になりきることは出来ませぬ。

あなたの親の意志では、あなたを鬼熊の親にするか、孟子の母にするかを決定することは出来ませぬ。

立つて帯をしめましょう。

その呪いの言葉をとじましょう。

人生に犠牲ということは如何なる場合にもありません。

たった一人立つのです。八方ふさがったような中に立つのです。

あなたはあなた自身でなくてはなりません。

三、苦か楽か

楽を追うか、苦に突入するか。

それには、はつきりとした断案があります。議論ぬきに信じてあなたの心の自由な働きにまかせて実際に生かすのです。

「苦を逃避せず、享樂によつてゴマ化さず、神に祈祷せず、自ら苦を背負つて起ち上るのです。」

人生を楽しむ所だと定めて、楽しみを追うて走る人の一生涯にはどこかで行き詰りがあります。毎日浮かぬ顔して、嫌な犬に綱をつけて引かれてゆくように、常に眼に見えぬ暗い力にひかれます。苦しうに強いられつつ生きてゆかねばなりません。

「さあどんな苦なりと来い。」と苦を受けてゆきます。かく人生の方向転換が出来たならば、どんな世界が開いて来るかは、出発した者だけにわかつてきます。

如何なる人間苦も、あなた以上のもは出て来ませぬ。しつかりした足どりで生きてゆけば、「どんな苦しみだつて来い。」と乗りこえられます。

「この暑いのに行かれるものか。」と言います、出て見るのです。さほど暑いことはありません。大儀なと思えば、飯を食うのさへ大儀になります。頭が悪い、体がだるい、今日は寒い、今日は暑いと言つて、横着になれば、ついに今日と言つて、はつきりした日はありません。精進すべき日はありません。

無限の苦が大波小波待っています。

数万トンの軍艦が堂々波浪をけつて進むように、真一文字に進みます。禍や苦は、やがて転じて福となり、楽となります。苦の中に立つてゆく時だけ、真のよろこびは得られます。

四、尊きものの生れる素材

至つてよきものは、至つて悪きものより生れて来ます。よきものはあしきものより生れて来ます。忠臣蔵の大石内蔵之助その他四十七士は、吉良上野介の貪慾、浅野長矩の短慮等のあしきものが生んだのであり、楠公は、足利尊氏が生んだのであります。

親鸞、日蓮等の聖者は、戦乱に乱れた鎌倉時代、法燈の光うすれて、伽藍仏教、名と権勢横暴に墮落した鎌倉時代、このいとうべき、暗黒世界の底に流れる日本の本願が生み出したのです。

国乱れて忠臣出で、家貧しゆうして孝子出づとは、こうした相を言ったものです。釈尊の出世には仏敵提婆がついています。過去世物語を見ても、釈尊の出られた所には提婆が必ず一緒に出ます。釈尊から提婆は出て来ませんけれども、提婆から釈尊が生れて来ます。ですから釈尊は、提婆の恩を知つて、善知識だと言つておられます。更に提婆がやがて成仏すべきことさえ言つていられます。

大地の上は永遠に浄土にはなりません。無限の悪と苦がわだかまります。しかしながら悪と苦はそれがそれでおわるならばいけないことだけれど、悪や苦がやがて美しいもの、よきものを生み出す素材になった時、若や悪は生きて来ます。

日本が生きているとは、苦しい状態に出会わぬことでも、悪人が出ないことでもありません。永遠に苦しい状態にも出会えば、悪人も出て来ます。けれどもその反動として、美しきもの、よきものを生み出すか否かが問題であります。新しいゴム毯はたたきつければとびあがります。日本が偉大であるか否かは、あしきものを素材として飛躍し得るか否かで決まる問題です。

苦しい境遇に立つているあなたがたは考えねばなりません。生きるか死ぬるかは、その苦しい状態の中に、如何なる美しいものを創造するかが問題です。

家庭が乱脈になる。

その中をじつと注目します。

誰もその中に光として立つてくれるものはないのでしょうか。

「天の將に大任を此の人に下さんとする。先づその心を苦しめ、その筋骨を勞せしめむ。」とか。

苦を抱いた人、それは宝石を抱いているのです。

苦悩においては外に、何物の尊いものも生れない。

あなたの現状を憶う。
難関又難関、苦悩又苦悩。

もしそれにまければ、苦はあなたを殺します。

しかし苦の唯中に立つて、不断に勝ちつづけるならば、苦はやがてその人を宝玉に
してしまいます。

苦を生かさぬ偉人もなければ聖者もありません。家が貧しければ、その貧の中に立
ちましょう。

呪いや憎しみばかりに立つたら、その中に立ちあがりましょう。
乱れた社会のただ中にはつきり立ちましよう。

あなたは女性です。女性だつて時には男性にまざります。

晴黒の潮流がその時代を流れ、国家を流れ、家庭を流れる時、その底には生きた大
生命が、至純に清浄に流れます。その清き大生命が、救世主や善人や先駆者を生み出
します。その大生命の流れも本願力と申しておきましょう。本願の流れを見出し、そ
の生命の流れに棹さすことが道であります。真に生きるとは実にこの本願を発見し
て、本願を生活し、本願に立上ることであります。

苦を抱きしめて立つ時、その力はあなたの上に動きます。

外ばかり見て、いたずらに泣いていたり、ひがんでいたり、追われていないで、苦
を生かすために、はつきりと生きかえりましよう。

五、苦悩と人生の意義

生きていることに尊い意義を見出すか、生きることは無意味なことだと見るかは、
その人々の勝手です。

しかしすでに生きています。生きている以上は、その処に何物かを生み出さずには
いられぬのが人生です。

「女性」この名をもつていることを悲しむ人もあるでしょう。あるいは女性であるこ
とを喜んでいる人もあるでしょう。かつて私は数十百人について、

「あなたは女性であることをよろこびますか。」と聞いて見たことがあります。する
とその大部分の人たちは、女性であることを呪わないまでも、女性であることを好ん
ではいませぬ。

女性であることをよろこばぬ原因については、もつと深く人間のつくつた習慣や制
度の上に欠陥があることを観察しなければなりません。しかし花が花であること、草
が草であること、男が男であること、女が女であることを好まず嫌悪した世界がはた
して明るいでしょうか、女性は女性であることを讚美し、感謝し得る所まで、女性を
たかめ、自己をたかめ、新しい人生を創造せねばなりません。それは現代日本の女性
の一大急務であります。ただいわゆるモダンガールのように断髪して洋装している
のみであつたり、普選を女性にまで及ぶように運動することのみでは、決して女性は
たかまつたではありません。

話をもとへもどします。すでに生れて来た以上は、我らは、そこへ必ず意義を発見
しなければなりません。

食ふことや性欲がそれだけでおわるのは動物の世界です。その事実の上に、更に価値を見出し、創造するのが人生生活であると申しておきました。

真理と言ひ、価値と言ひ、或は当為というも、すべて人生に見出される光であり、生命であります。

芸術(美)と言ひ、道徳(善)と言ひ、哲学(真)と言ひ、宗教(聖)と言ふも、一切は人間によつて創造されてゆく価値の生活であります。

人生の創造とは限りなき生命の世界に棹さしてゆくことでもあります。

人生にもし苦がないとしませば地上は実につまらぬ所であり、生甲斐のない所でもあります。生甲斐があるのはただ苦があるからであります。

なぜならば、苦がないならば、人間の真創な問題はなくなりません。さきに申した価値はあり得ないので。苦がなければ、歌もありません。詩もありません。劇もなければ、文字もありません。道徳もなければ、もちろん宗教もありません、仏も神もありません。聖者もありません。悪人もありません。人生の色彩の一切がありません。血あり涙あつてこそ、そこに千種万様の輝しい色彩いろどろがあります。苦は実に生きた人生を生み出すたつた一つの根本的原因です。

人生の意義は実にこの苦あるがためであります。ですから苦は実に尊きものを生み出す母体であります。

いたずらに泣いていないで、この難度海を悠々と渡る大船の上に、私を見出さねばなりません。

私は一言つけ加えます。親鸞聖人は彼の信仰を告白された御本典の総序の冠頭に、「竊におもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり。」

と申されました。難思の弘誓とは、無始無終にわたつて流れたまう如来の大願力であります。一切群生のたましいのすくわれてゆく力であります。船であります。この如来の真実の大願こそ、わたるに苦しき海を度らせたまふ大船であるとの仰せであります。

救われねばなりません。一日も早く信仰に目覚めねばなりません。信仰の世界に生れ出でた時、苦悩はついに無限の感謝に融合せられて、苦が単なる苦でなくなるのです。苦は一切の価値を生む根源であります。あなたの心に光のおとづれる日、苦をかかえて、永遠の微笑があなたを占領します。